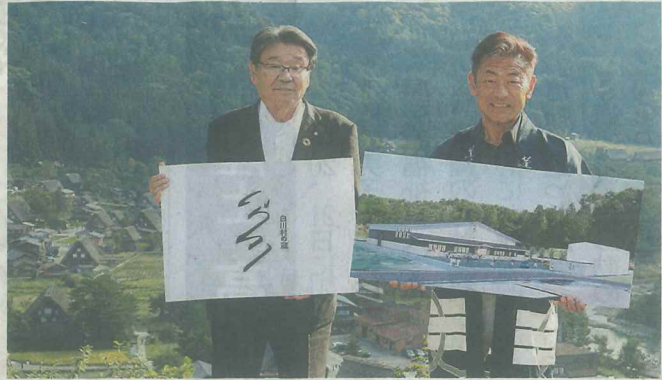


26年稼働予定 100年ぶり復活へ

白川村に酒蔵 産業盛り上げ



「白川村の蔵」のロゴとイメージ図を持つ渡辺社長(左)と成原村長(右)。白川村萩町の萩町城跡展望台で。

飛騨の渡辺酒造店と協定

「どぶろく祭り」など酒が地域文化と結びついてきた白川村に、100年以上なかった酒蔵が復活する。飛騨市の渡辺酒造店が建造、運営を手がけ、2026年9月の稼働を予定する「白川村の蔵」。1日には村役場で、同店と村などの間で建造に関わる協定が結ばれた。

同村では710年に始まったとされる「どぶろく祭り」が受け継がれ、清流と地元産米を使った日本酒造りも行われていたが、大正時代までに酒蔵が失われていた。復活の話が浮上したのは2020年9月。同店

が以前から同村の米や水を利用して日本酒を「白川村」として販売していた縁があり、成原茂村長が持ちかけた。

酒蔵は同村鳩谷の旧白川小学校跡地に建てられ、鉄筋2階建て延べ約2千平方メートルになる見込み。村産の米「山田錦」や井戸からくみ上げた水などを使用し、年間約18万リットルを製造する予定だという。10億円余りを見込む建設費は、半分を村が負担する。

協定式では、成原村長と同店の渡辺久憲社長(55)が今後の展望や酒蔵の趣旨を説明。鳩谷区の山崎達也区

長とともに「白川村酒造進出に関する地域活性化協定」を締結した。

渡辺社長は「今まで積み上げてきたノウハウを生かして、最高の設備で日本酒を造りたい」と意気込む。出来上がる酒については

「白川村の水や山田錦の特性を考えると、爽やかできれいな甘みがあって、飲み飽きない味になる」と予想。山田錦は県外産のものも使用する。

村の負担額の一部は、クラウドファンディング型と企業版のふるさと納税で募る。返礼品には、同店が造った限定の日本酒「COMING SOON」などがある。

成原村長は「世代や地域を越えた文化の継承には日

本酒の存在が不可欠。新たな酒蔵を起点に産業を盛り上げていきたい」と話した。(及川凌)